

現代インドネシアの仏教信仰

木村文輝

(愛知学院大学)

1. インドネシアの仏教復興

インドネシアにかつて仏教文化が栄えていたことは広く知られている。しかし、後にイスラム勢力が浸透した結果、この地域の仏教の伝統は、17世紀頃までにバリ島などの一部の例外を除いて表面的には途絶した。そして現在、同国では国民の約9割をイスラム教徒が占めている。そのようなインドネシアにおいて、仏教が国家公認の宗教となり、数百万人の仏教徒が存在していることはあまり知られていない。

同国の仏教復興運動は19世紀末に始められた。⁽¹⁾ 当時、幾つかの団体が個別にこの運動に取り組んでいたようであるが、その中でも特に重要な役割を果たしたのが神智学協会 (Theosophical Society) である。同協会は西欧の仏教研究の成果にもとづいて、仏教の教えを普及させることに貢献した。また、郭徳懐 (Kwee Tek Hoay) という人物は、同協会との密接な関係を保ちながら、中国系の人々に仏教を広める役割を果たしている。さらに、同協会の招きに応じてスリランカのナーラダ (Narada) 長老がインドネシアを訪問したことも、仏教復興を活性化させたようである。のみならず、同協会と関わりのあった人々が、インドネシア独立後の仏教復興の中で、中心的な役割を担うことになったのである。

その後、仏教復興運動は1950年代に入ってから飛躍的に進展した。とり

わけ、1959年に政府の関係者や各国の仏教界の代表者を招いて開催されたヴェーサーカの祭典は、仏教が劣った宗教であるという国民の偏見を取り除き、仏教徒の数を一挙に増大させるきっかけになった。またこの時に、現代のインドネシアで最初の比丘僧伽が設立された⁽²⁾。こうした一連の運動を指導したのが、インドネシア人として初めて比丘になったアシン・ジナラッキタ (Ashin Jinarakkhita) 師である。彼の活動の軌跡は、1950年代以降の仏教復興の歴史にほぼ重なると言っても過言ではない。このことは、今日のインドネシア仏教の特色が、何らかの形で彼に由来することを意味している。

このアシン・ジナラッキタ師の基本的な立場は、どのような形の仏教であれ、それが等しく釈尊の教えを受け継ぐものである以上、必ず優れた思想を含んでいる。それ故、上座仏教、大乘仏教、金剛乗などの垣根を越えて、あらゆる仏教思想を等しく尊重することが重要だというものである。今日インドネシアでは、彼のこうした思想はブッダヤーナ (Buddhayana, 仏乗) と呼ばれている。

アシン・ジナラッキタ師がこのような考え方をもつに至った背景には、彼自身の仏教遍歴が影響していると思われる。すなわち、中国系のインドネシア人であるアシン・ジナラッキタ師は、幼少の頃から中国寺院に参詣し、儒教や道教などと結び付いた中国の伝統的な仏教信仰の中で成長した。また、学生時代には神智学協会の会員として、原始仏教などの教義を学んでいる。その後、数年間のオランダ留学の間に非家 (anagarika) として生涯を送ることを決意した彼は、帰国後にジャカルタの中国寺院で臨済宗の沙弥として出家した。さらに、1953年にはビルマで上座仏教の比丘としての具足戒を受け、1954年に帰国してからは、仏教を広めるための精力的な活動を続けてきた。「純粋な仏教などあり得ない。仏教徒であることが

—182— 現代インドネシアの仏教信仰 (木村文輝)

第一に重要だ」という彼の言葉は、⁽³⁾まさに彼自身の様々な仏教体験から導き出された結論だと言えるだろう。

同時に、特定の流儀にこだわらない彼の立場こそが、仏教を復興させ、それを定着させる原動力になったことは確かである。インドネシアには、中国仏教の影響を受けた人々と、かつてのジャワ仏教の伝統を受け継ぐ人々と、神智学協会や東南アジア各国の比丘達の布教活動を通して新たに仏教信仰に目覚めた人々など、多様な仏教徒が混在している。これらの人々の仏教信仰を一つにまとめなければ、多民族国家であるとともに、仏教徒が明らかに少数派でしかないインドネシアに仏教を根付かせることは難しかったであろう。アシン・ジナラッキタ師は、「インドネシアには、その精神風土に適した独自の仏教があってもよい」と語っているが、そこにはこうした計算も働いていたと推測される。

しかし、1970年代に入ると、アシン・ジナラッキタ師の立場に批判的な人々が現れた。すなわち、タイやスリランカなどで上座仏教の修行を修めた人々が、正統的な上座仏教の導入を目指すようになったのである。また、中国系の人々からは、純粋な大乘仏教を求める要求も高まった。その結果、インドネシアの仏教界には、アシン・ジナラッキタ師が率いるサンガ・アグン・インドネシア (Sangha Agung Indonesia) と、サンガ・テラヴァーダ・インドネシア (Sangha Theravada Indonesia)、それに、サンガ・マハーヤナ・インドネシア (Sangha Mahayana Indonesia) という3つの比丘僧伽が分立することになった。ただし、この中で最大の勢力を保有しているのはブッダヤーナを掲げるサンガ・アグンであり、同国の仏教徒の約7割がこの僧伽に従っているとのことである。⁽⁴⁾本稿では、ジャカルタ近郊におけるサンガ・アグンとその信者達の仏教信仰に関して、崇拜の対象、礼拝集会の特色、仏教が抱える問題と魅力の3点から論ずることにしたい。

2. 崇拝の対象について

ブッダヤーナにおける崇拝の対象に関して、最も特徴的なのはアーディ・ブッダ (Adi Buddha), すなわち本初仏の存在である。これは、「五原則 (Panca Sila)」と呼ばれるインドネシアの建国の理念の第1条として、「唯一神への信仰 (Ketuhanan Yang Maha Esa)」が国民に求められたことに対する対応策であった。アシン・ジナラッキタ師は、ジャワ島で発見された古い仏教聖典の『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (Sang Hyang Kamahāyānikan)』, すなわち『聖大乘論』に述べられているアーディ・ブッダに着目し、これが仏教の「唯一神」だという立場を表明したのである。その際に、アーディ・ブッダは世界の創造主ではなく、その意味においてイスラム教やキリスト教の唯一神とは異なる概念であることが強調された。また、アーディ・ブッダは法身仏であり、ブッダのエネルギーの象徴であるという説明もなされている。ただし、アーディ・ブッダはもともとの『聖大乘論』の中で重要な位置を占めていたわけではないし、古いジャワ仏教の聖典の中にその教義的な裏付けがあるわけでもない。むしろ、この仏はアシン・ジナラッキタ師、もしくは彼の周辺の人々によって恣意的、人為的に「ジャワ仏教」の中心に押し上げられ、インド後期密教の研究成果にもとづいて、教義面での充実がはかられていることが既に指摘されている。⁽⁶⁾

けれども、このアーディ・ブッダの導入は、正統的な上座仏教を志向する人々の間に激しい反発を引き起こし、僧伽の分裂の大きな要因になった。とは言え、上座仏教の人々にとっても、唯一の「神への信仰 (ketuhanan)」という課題を避けることはできなかった。そこで、彼らはこの語を唯一最高の「神性 (ketuhanan)」と解釈し、絶対的で無限定なニッパ

—184— 現代インドネシアの仏教信仰 (木村文輝)

ーナ (Nibbana, 涅槃) がそれに相当すると主張した⁽⁷⁾。この主張に対してアシン・ジナラッタキタ師は、それでは政府の求める「神」への信仰という条件が満たされないとして、今日に至るまで批判を続けている。しかし、ブッダヤーナの教学に関して現在指導的な立場の人々に尋ねると、アーディ・ブッダはヒンドゥー思想におけるブラフマンに近い非人格的な絶対存在であり、それは上座仏教の人々が主張するニッパーナと本質的には同じものだと説明される⁽⁸⁾。このことは、唯一の「神」の解釈をめぐる、ブッダヤーナの側で微妙な変化が起こっていることを示しているのかもしれない。

さらに、アーディ・ブッダを導入した理由について、アシン・ジナラッタキタ師は端的に「仏教を守るためだった」と語っており、それが当初は極めて政治的な理由によるものであったことを窺わせる。ところが今日では、アーディ・ブッダはあらゆる仏教思想を総合するブッダヤーナのシンボルとして、教義的にも重要な役割を与えられている。とりわけ、毘盧遮那、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就の五仏はアーディ・ブッダの顕現であり、それらはアーディ・ブッダの様々な側面を表しているという説明は⁽⁹⁾、この点を強く印象づけるものである。

このようなアーディ・ブッダに対する礼拝の具体的な形態としては、儀式的冒頭でアーディ・ブッダに対する帰依文 (Namo Sanghyang Ādibuddhāya) を3回唱和することが定められている。また、アーディ・ブッダは無相の存在であるとして、その尊像を作ること考えられていない⁽¹⁰⁾。そこで、アーディ・ブッダの礼拝を行う際には、いずれの方角を向いて行ってもかまわないとされている。そのため、例えばボゴール近郊のチパナスにあるヴィハーラ・シャキャワナラン (Vihara Sakyawanaran, 釈林禅寺) では、人々が建物内部の仏壇上に安置された仏像に礼拝した後に、建

物から外へ出て、虚空に向かって礼拝を捧げる行為を3回繰り返している。この虚空に向けての礼拝こそが、アーディ・ブッダに対する礼拝である。そこには、イスラム教徒がメッカに向かって行う礼拝の影響があるのかもしれない。ともあれ、今日のブッダヤーナの信者達の間で、アーディ・ブッダは単に政治的な理由から生み出された形式的な存在ではなく、日常の仏教信仰の中に溶け込んだ身近な存在になっているように感じられる。⁽¹⁾

ところで、ブッダヤーナの信者達の崇拜対象に関して、アーディ・ブッダの問題とは別に、さらに2つの興味深い点を指摘しておきたい。1つ目は、ジャカルタの中心寺院であるヴィハーラ・エーカーナ・グリハ (Vihara Ekayana Grha, 一乗禅寺) に集まる人々の間で、観音菩薩と阿弥陀如来に対する信仰が人気を集めていることである。これは、その地域の信者の大半が中国系の人々であることを考えれば特に不思議なことではない。しかし、彼らの多くが、様々な仏教思想の中で上座仏教に最も親近感を抱いていると述べることには若干の驚きを覚えた。のみならず、彼らに上座仏教と大乘仏教と金剛乗の教えの中で、どの教えが最も魅力的かと尋ねると、多くの信者達はまず始めに「これらの教えはすべて同じものだ」と返答した上で、「あえて言えば、最もシンプルな上座仏教が魅力的だ」と回答する。ここには、ブッダヤーナの理念が人々に広く浸透している様子が表れていると言えるだろう。

もう一つの点は、現在ブッダヤーナの信者達の間で、インドのサイババに対する信仰が広まっていることである。これは、アシン・ジナラキタ師が1984年にサイババと面会した後に、長い間患っていた足の痛みが消えたことで、サイババを自らの師匠 (Jagad Guru) だと公言するようになったことの影響である。このような傾向は我々に奇異の念を抱かせるかもしれない。けれども、インドネシアの仏教徒達にとって、これはかつてのア

シン・ジナラッキタ師の活動を彷彿とさせるものであるらしい。すなわち、彼自身は否定しているものの、多くの人々が彼のもつ超自然的な力を経験し、そのことが、彼の指導する仏教復興に成功をもたらした大きな要因になったというのである⁽¹²⁾。こうした信仰の背後には、一般にクバティナン(kebatinan)と呼ばれるジャワ神秘主義の存在を指摘することができるだろう。とりわけ、様々な修行を通して超自然的な力を身につけ、その力を用いて行う呪術的な治療活動に対する信仰の根強さが思い起こされる⁽¹³⁾。ここには、はからずも仏教信仰と伝統的な神秘主義との混淆が垣間見られるのである。

3. 礼拝集会の特色について

さて、ブッダヤーナが様々な仏教思想を総合する立場であるとは言え、一つの礼拝や儀式の中で異なる流儀の様式を混在させているわけではない。各寺院では毎月決まった日時に上座仏教、大乘仏教、金剛乗のそれぞれの様式に従った礼拝集会を行っており、信者は自らの好みに応じてそれらの集会に参加している。そうした中で、最も多くの参加者が集まるのが、大抵の寺院で日曜日に開催される上座仏教式の礼拝集会である。

一例として、ジャカルタのヴィハーラ・エーカーナ・グリハでは、毎週日曜日の午前8時半から1時間にわたって幼児の礼拝集会と小中学生の集会が同時に行われ、それぞれに数十人の子供達が参加する。それと平行して、父兄の懇談会(ダルマ・クラス)も比丘を交えて開かれる。その後、午前10時からは約1000名の若者達が寺院のホールを埋め尽くし、2時間にわたる集会を開催する。さらに、午後4時半からは一般の人々による集会が1時間半にわたって続けられる。これらの集会では、礼拝と法話、それ⁽¹⁴⁾に数分間の瞑想が数回に分けて行われる。

こうした集会で注目すべき点は、それが上座仏教式の礼拝であるにもかかわらず、その冒頭でアーディ・ブッダに対する帰依文と、「かの世尊、阿羅漢、正等覚者」に対する帰依文と並んで、「一切の菩薩摩訶薩」に対する帰依文が3回ずつ繰り返し唱和されることである。ここにもブッダヤーナの立場が明確に示されていると言えるだろう。⁽¹⁵⁾

また、これらの集会はすべて在家の信者達によって取り仕切られており、礼拝の進行役や法話も、多くの場合、在家の人々が行っている。このことは、パンディタ (Pandita) と呼ばれる在家の仏教指導者が、儀式の際に比丘の補助を務めたり、比丘が不在の場合には彼らのみで儀式を遂行することと関係がある。このパンディタの制度は、国内各地に数多くの信者を抱えながら、比丘の数が極めて限られていることを補うために、アシン・ジナラキタ師が整備したものである。けれどもこの制度は、同国の仏教復興運動が、もともと在家の人々によって始められたという、歴史的な背景に由来していることは明らかであろう。⁽¹⁶⁾

さらに、中国系の信者を数多く抱えるブッダヤーナとマハーヤーナの寺院に共通する特徴として、中国的な要素が極力排除されていることが挙げられる。⁽¹⁷⁾ それぞれの信者に尋ねると、「巨大なロウソクや線香と、おもちゃの紙幣などの使用には何の意味もなく、非合理的で呪術的な慣習にすぎない。そのようなものに大金を払うのであれば、貧しい人々に喜捨を行う方が有意義だ」という回答が得られる。これは、同国の仏教復興を推進する過程で、様々な歴史的、文化的な背景をもつ仏教信者を統合するために、アシン・ジナラキタ師があえて中国的な要素を排除したことの成果である。⁽¹⁸⁾ このような点にも、彼が目指したインドネシア独自の仏教が見事に花開いていると行うことができるのである。

4. 仏教が抱える問題と魅力について

インドネシアでは、先にも述べたようにすべての国民が「唯一神への信仰」を求められており、それにもとづいて、国家が公認する5つの宗教のいずれかに帰属することを義務づけられている⁽¹⁹⁾。また、その一環として、教育機関では毎週定期的に宗教の時間が設けられており、そこで自らの帰属する宗教の授業を受けることになっている⁽²⁰⁾。その結果、人々の中には宗教心が自然なものだという意識が醸成されるとともに、自らの宗教に対する帰属意識も育まれていく。このことが、礼拝集會に多くの人々が参加する素地を作っていることは間違いない。

しかしながら、インドネシアではイスラム教の勢力が圧倒的であり、スハルト政権の時代には、仏教徒に対して暗に政治的な圧力が加えられ、イスラム教への改宗が勧められたこともあったという。また近年では、仏教界に対する政治的干渉はかなり減少したものの、イスラム教と他宗教との宗教紛争が頻発するとともに、1998年には仏教徒を多く抱える中国系の住民に対する大規模な襲撃事件がジャカルタで発生した⁽²¹⁾。そのような情勢下において、仏教界にも他の宗教との軋轢を生み出さないための細心の注意が求められる。そのため、一部の団体を除いて、現在仏教界では新たな信者を獲得するための布教活動をほとんど行っていない。単純に考えた場合、仏教徒が増加すればイスラム教徒が減少することになり、イスラム教徒の反感を買うことになるからである。その結果、仏教徒の数はほぼ横ばい状態であるという。

では、そうした状況にもかかわらず、人々が仏教信仰を守っている理由はどこにあるのだろうか。ブッダヤーナに帰依する約70人の比丘と信者達に仏教の魅力を探ねたところ、慈悲の精神や瞑想の素晴らしさをはじめと

する様々な回答が寄せられた。その中でも、業（karman）の理論が合理的であり、それは現代の科学主義にも矛盾することなく受け入れられるという点を挙げた人が過半数に上った。業の理論がこれだけ注目されているのは、業とそれにもとづく因果応報の論理が仏教思想の基本であり、釈尊の教説の中心だと説かれていることに由来する。

また、何らかの理由で他の宗教との関わりを持った経験のある複数の人々からは、仏教が自己を抛り所とすることを説く宗教だという点が魅力として挙げられた。つまり、ブッダヤーナでは信者に対して五戒の遵守と瞑想の実践、および、定期的な寺院への訪問を求めるのみであり、日常生活のそれ以外の点に対する細かい要求を行っていない。それ故、イスラム教やキリスト教とは異なり、仏教では各人の自主性が最大限に尊重されることが魅力的だというのである。ちなみにアシン・ジナラッキタ師は、仏教が柔軟性をもつ宗教であり、他の宗教やその信者に対していかなるプレッシャーをも与えないことにこそ、仏教の最大の魅力があると語っている。彼のこの見解も、広い意味では自主性の尊重という回答に含まれるとみてよいだろう。

自らの自主性と同様に他者の自主性を尊重することで、自我意識は消滅し、他者に対する慈悲の心が生ずる。この慈悲、すなわち普遍的な愛（Universal Love）を日常生活の中で実践することによって、人々は煩惱から離れて心の安らぎを得ることができる。このように説くアシン・ジナラッキタ師の教えは、皮肉にも人々に対して「唯一神への信仰」を求める政府の方針にも助けられながら、確実に人々の心の中に根を下ろしているように思われる。同時に、現代のインドネシアの仏教は、同国の政治と社会の状況に左右されながらも、独自の信仰形態を確立しつつあるとすることができるであろう。

注

- (1) インドネシアの仏教復興については、拙稿「インドネシアの仏教復興とその現状」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』8（2000）を参照されたい。
- (2) 1959年のヴェーサーカの祭典については、拙稿「全日本仏教会とインドネシア——一九五九年のウエサカ祭出席と戦犯遺骨送還運動——」『禅研究所紀要』（愛知学院大学）28（2000）を参照されたい。
- (3) 以下に示す Ashin Jinarakkhita 師の見解は、1997年11月2日—3日と2001年3月8日に Vihara Sakyawanaran (Cipanas) で筆者が同師から直接伺ったものである。
- (4) 現在 Sangha Agung Indonesia の Anu Maha Nayaka である Aryamaitri 師（1997年11月5日、Jakarta にて）のご教示による。
- (5) “ādibuddha”の語は『聖大乘論』の中では7つの三昧地の中の第5、Mahāmuniwara Cintāmani Samādhi の説明文で用いられる程度である。同書を翻訳した石井和子氏は、この語を普通名詞として「本来の仏」と訳されている（「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン（聖大乘論）』全訳」『伊東定典先生・渋澤元則先生古稀記念論集』東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室、1988, p.77）。
- (6) Iem Brown, “Contemporary Indonesian Buddhism and Monotheism”, *Journal of Southeast Asian Studies* 18(1)(1987), pp.112-115と、Heinz Bechert, “Buddhism in Modern Java and Bali”, 『仏教研究』20（1991）, p. 170を参照。
- (7) これは、“ketuhanan”という語に「神への信仰」と「神性」という2つの意味があることを利用した主張である。ちなみに、「五原則」を提起した初代大統領のスカルノは、この語を唯一最高の「神性」という意味で使用し、諸宗教の統合原理とみなしていた可能性を石井和子氏が指摘している（『インドネシアにおける諸宗教の共存』*Quadrante*（東京外国語大学海外事情研究所）1, 1999, pp.168-183）。
- (8) Majelis Buddhayana Indonesia (MBI) の中央委員会委員である Parwati Soepangat 氏（2001年3月9日、Bandung にて）と、MBI の Sekretaris である Krishnanda Wijaya Mukti 氏（2001年3月12日、Jakarta にて）のご教示による。
- (9) 『聖大乘論』では、「光り輝くもの (diwarūpa)」の顕現である「仏陀世尊」から五仏が生み出されると述べられている。石井和子氏は、この仏陀世尊がチベットやネパールの密教というアーディ・ブッダに相当するとの考察を加えているが（石井前掲論文、1988〈本稿注5参照〉p.93）、ブッダヤー

ナの教学もそれと同じ解釈にもとづいていると言えるだろう。

- (10) チベットやネパールでアーディ・ブッダの尊像が作られていることは対照的である。
- (11) これに対して Sangha Mahayana Indonesia では、Tathāgata Sakyamuni Buddha を「唯一神」とみなしているが、それはあくまで形式上の事柄であり、「唯一神」に対する特別な礼拝などは行われていないという。
- (12) Ashin Jinarakkhita 師の伝記 (*Menabur Benih Dharma di Nusantara*, Bandung, 1995) の著者である Edij Juangari 氏 (2001年3月12日, Jakarta にて) のご教示による。
- (13) クバティナンの内実は極めて多様であり、それを一義的に定義することは不可能に近い。また、呪術的治療活動に対するクバティナン諸流派の見解は必ずしも一致していないものの、それが「多くのクバティナン活動の重要な出発点であり、一般社会のレベルでのクバティナンの繁栄ぶりの基盤として無くてはならない要素である」と福島真人氏は述べている (「「信仰」の誕生—インドネシアに於けるマイナー宗教の闘争—」『東洋文化研究所紀要』113, 1991, pp.155-162)。
- (14) Vihara Ekayana Grha では、この他に毎週木曜日の午後6時半から8時まで金剛乗式の集会を行い、太陰暦の1日と15日の午後7時半から9時まで大乘仏教式の集会を行う。また、太陰暦の19日には、午後7時から9時まで観音菩薩の礼拝集会も開催されている。
- (15) この点はすでに、前田惠學氏 (「最近インドネシアにおける仏教儀式—Pancaran Bahagia について—」『仏教研究』7, 1978, pp.12-14) と、Heinz Bechert 氏 (“The Buddhayāna of Indonesia: A Syncretistic Form of Theravāda”, *Journal of the Pali Text Society* 9, 1981, p.15) によって報告されている。ただし、両氏が紹介している阿弥陀仏、観自在菩薩摩訶薩、大勢至菩薩摩訶薩、弥勒菩薩摩訶薩、地藏菩薩摩訶薩、毘沙門菩薩摩訶薩、薬師菩薩摩訶薩に対する帰依文は、一般の集会では現在唱和されていない。
- (16) Pandita の制度は Sangha Theravada Indonesia でも設けられているが、Sangha Mahayana Indonesia では取り入れられていない。
- (17) この傾向は、Sangha Agung Indonesia よりも、むしろ中国系の信者が大半を占めている Sangha Mahayana Indonesia に顕著であり、前者が祀っている中国の伝統的な神像をも後者は排除する傾向にある。
- (18) 併せて I. Brown 前掲論文 (本稿注6参照, pp.110-111) を参照。
- (19) 5つの公認宗教とは、イスラム教、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンドゥー教である。

- (20) 学校教育で教えられる仏教の内容は、大抵の場合上座仏教のものである。このことが、多くの信者達に上座仏教への親近感を抱かせる一つの要因になっている。
- (21) 1998年のジャカルタでの騒擾の際に、当地の仏教寺院はいずれも襲撃を受けていないとのことである。

追記、本文中の記載は、1997年10月30日—11月5日と2001年3月6日—13日に、Ashin Jinarakkhita 師をはじめとする同国仏教界の関係者、ならびに、Vihara Ekayana Grha (Jakarta) に集まる信者達から賜ったご教示に多くを依っている。この場を借りて御礼申し上げます。

追々記、Ashin Jinarakkhita 師は2002年4月18日に、世寿80歳、法齢48歳にて円寂された。

